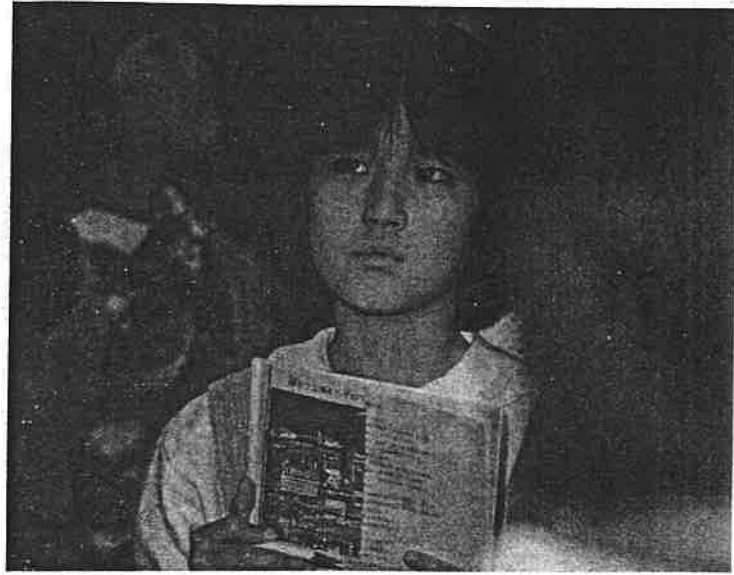


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494



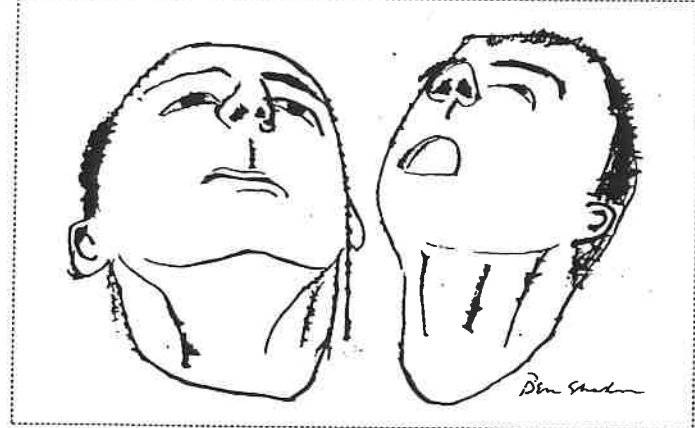
船を見つめる

**新年にあたって**  
第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

明けましておめでとうございます。  
本年三月一日は、太平洋ビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験で日本の漁船第五福竜丸が被災して四十年になります。  
私ども(財)第五福竜丸平和協会では、来る二月十九日に記念シンポジウム「ビキニ事件四〇周年と平和」を開催し、核兵器・核戦略に関する最新の事情についての専門家による記念講演と、ビキニ事件とその後およびそれがもつ今日的意義について考えるパネル討論を行います。  
米ソ冷戦終結後も核兵器は存続し、それをいっそう精巧な形で利用しようとする政策はつづけられており、また、核兵器の一部の廃棄・解体にともなう核汚染の可能性を含めて、核問題は今日でも目が離せない問題です。  
最近、各地で戦争と平和に関する創意ある博物館等がつくられています。第五福竜丸展示館は、水爆の恐ろしさを被害船自ら語りかけ、核兵器のない未来への願いを体現した、世界でもユニークなミュージアムであり、とりわけ若い世代における平和意識の涵養に少なからず貢献してきました。  
当協会では、四十年という節目の年にあたり、来館者の便宜と教育効果を考え、視聴覚設備の導入をはじめ、展示、案内、資料、サービス事務各方面にわたる整備充実を、東京都のご理解もえながら、すすめていきたいと考えていますので、ひきつづき皆様のご支援・ご鞭撻をお願いいたします。  
この四十年間は、私個人にとっては大学生時代からの四十年でした。幸い健康にもめぐまれ、自分の時間の一部をさいて原水爆禁止と平和のための仕事のお手伝いをさせていたことができました。私は、第二次世界大戦の末期に、東京の小生として学童集団疎開を経験しましたが、今年はその五十周年に当たります。私の同期生たちがまとめた記録『山河清くとも』は江戸東京博物館にも寄贈されています。第五福竜丸展示館を訪れる小学生の顔をみると、当時の記憶がよみがえり、感慨深いものがあります。  
本年が皆様にとって有意義な一年でありますよう心からお祈り申し上げます。

## 東京にあった 「ラッキードラゴン」 の素描

一九九一年秋に行われた「ベン・シャーン展」の記憶はまた新しい。同展では、「ラッキードラゴン」シリーズの中で、タイトル名



「『降下物II』のための習作」19.1×25.4cm

だが、最近「出発の港」「その金よう日」「船主」「彼が死んだ」「降下物」「カメラマン」「壁新聞」「科学者」など、三十点近いラッキードラゴンに関する素描(ペン画など)が東京の某画廊に所有されて

そのものの「ラッキードラゴン」(福島県立美術館所蔵)、「我々は何が起こったのか知らなかった」、「二十羽の白い鳩」が出品されていた。  
一九六一年に制作された「ラッキードラゴン」シリーズは、前記の三点を含む十一点の連作である。久保山愛吉さんを描いた「ラッキードラゴン」は二メートルをこす大作である。同シリーズはベン・シャーン



「死んだ彼」26.0×19.7cm

多くは一九六五年、ニューヨークで出版された「久保山とラッキードラゴンの伝説」の原画であるが、中には「ラッキードラゴン」シリーズのための習作と思われる作品も含まれ、制作の過程がわかり興味深いものであった。同時に、こうした素描はまだ多数残されているのではないかと、新たな期待をいだかせた。  
「ラッキードラゴン」シリーズの全体像は、まだ明らかにされていないのではないだろうか。  
一九六〇年、来日したベン・シャーンは、焼津に赴いたといわれるが、具体的な足取りは不明である。

### ぜひご参加下さい

- ビキニ事件40周年記念シンポジウム  
「ビキニ事件40周年と平和」  
日時：一九九四年二月十九日(土)  
午後一時半～八時  
場所：(東京)学士会館三〇二号室  
プログラム  
(1)主催者あいさつ(13:30-14:00)  
第五福竜丸平和協会会長 川崎昭一郎  
(2)記念講演(14:00-15:00)  
「いま何をなすべきかー戦域ミサイル防衛計画(TMD)への参加を憂える」  
名古屋大学名誉教授 豊田利幸  
(3)パネル討論(15:15-17:45)  
・主題「ビキニ事件40周年と平和」  
・パネ 岩垂 弘(マサチューセッツ工科大学)  
田中里子(東京大学)  
藤田秀雄(京大)  
前田哲男(京大)  
山田英二(京大)  
参加費 千円(懇親会に参加の場合三円)  
(4)懇親会(18:15-20:00)  
●ビキニ事件40周年記念写真展  
「死の灰40年ー核にむしはまれるロンゲラップの人びとー」豊崎博光写真展  
会場 第五福竜丸展示館  
期間 二月二十二日(火)～五月二十二日(日)  
午前九時半～午後四時。但し、展示館休館日(月曜日)は休み。  
主催・第五福竜丸平和協会

ビキニ水爆事件のころ

増田善信

昨年十二月、京都の立命館大学の平和ミュージアムを見学し、第五福竜丸の被災をスクープした一九五四年三月十六日付の読売新聞を見て、あらためて四十年前のビキニ水爆事件を思い出した。

第五福竜丸が被災した三月一日の水爆実験を皮切りに、この年の五月中旬までに、アメリカはビキニとエニウェトクで六回の水爆実験をおこなった。その結果、マール諸島の住民が大きな被害を受け、第五福竜丸をはじめ、この年だけで八五六隻の船が被災し、久保山愛吉さんが約六ヵ月後に亡くなられたのである。

また、海水が放射能で汚染されたため、魚が汚染され、この年の十一月までに四五七万トンのマグロが廃棄され、魚やさんは商売が出来なくなるといふ状況さえ生まれた。また、各地で「放射能の雨」が降り、とくに天水を飲料水に使用している所では大問題になった。日本気象学会は五月二十日の総

会で、「水爆実験禁止に関する声明」を発表した。この声明は、①水爆実験によって成層圏に打上げられた放射能を持つ多量の灰は、地球をかこむ大気の大循環のために世界中に運ばれること、②このような大規模な大気汚染は長い間つづくので、日射その他の気象現象に異常をきたし、今後の凶冷その他は全く予想をゆるさないこと、を指摘して、原子兵器を含めたすべての大量殺害兵器の実験、製造、使用の即時禁止を要求したものであった。

この声明を発表した直後から世界的に異常気象が観測され始め、日本付近の六月、七月の平均気温も平年より二度近くも低下し、凶冷が心配されるようになった。

当時、私は杉並区の高円寺にあった気象研究所に勤務していたが、同僚と共同で、大きな火山噴火の後に起こる異常気象との類似から、この年の異常気象も、ビキニの水

爆実験によって成層圏にまで吹上げられたチリによってたらされた可能性があるとの論文を発表した。しかし、当時はこのような推論は国際的にはまったく認められなかった。

もちろんこの論文は、水爆が出現した直後に出版されたものであるから、当然、全面核戦争の気象への影響を論じたものではないが、カール・セーガンらが一九八三年に提唱した「核の冬」の先駆をなすものといってもいいであろう。

私たちは「気象研究所水爆調査グループ」を組織し、異常気象や気圧波、「死の灰」の降下域、放射能の雨、海水の汚染などの調査結果をまとめてパンフレット「原水爆と気象」をつくり、核兵器の廃絶を訴えて回った。

のちに原水爆禁止日本協議会（日本原水協）の理事長になられた安井郁先生は、当時、杉並公民館の館長をしておられた。先生は核兵器廃絶に大変熱心で、どんな小さな集会でも進んで出席された。私も時々一緒に、先生が国際情勢を、私が原水爆の気象への影響をお話したものである。

初めのころはまだアメリカの占

領時代の影響が残っていて、核兵器廃絶を公然と訴え得るような空気ではなく、中央区のある労働組合に呼ばれたときなどは、ほの暗い地下室で講演したこともあった。

しかし、放射能の雨が降り、マグロが捨てられ、魚やさんの営業が出来なくなるほど影響が出るにいたが、原水爆禁止の運動が「燎原の火」のように広がり、ついに原水爆禁止の署名が三〇〇〇万以上になった。この力を背景に翌五五年八月、第一回原水爆禁止世界大会が開かれ、九月には日本原水協が原水爆禁止を求める恒常的な組織として作られ、今日まで運動が続けられているのである。

いま、「冷戦は終わった。これからは対話と協調の時代だ」として、原水爆禁止運動そのものが不要になったかのような論調が流されている。しかし、世界にはまだ五万発もの核弾頭が存在し、事故でも核爆発が起こる危険があるのである。ビキニ被災四十周年、来年の原爆投下五十周年をひかえ、いまこそ久保山さんの遺言「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」を実現する時だと思ふ。

(元気象研究所研究室長)

ヒロシマからのメッセージ

山岡ミチコ

私たちは、被爆体験をふまえて、「再び過ちが繰り返されないうように」と、この四十八年間一貫して核兵器廃絶を訴え続けてきました。

米・ソは、核兵器の開発競争にとどまることを知らず、いまや核兵器は、ヒロシマの原爆とはくらべものにならないほど高度で多様化している現状です。そして日本を取りまく核状況は、危機感が高まる一方です。

日本政府は、日本に寄港するアメリカの艦艇のすべてを受け入れて、アメリカの通告を鵜呑みにしており、点検も確認もしていない模様です。

非核三原則は、ますます空洞化をすすめる一方となっており、危険度は高くなっていくばかりです。

ヒロシマは、その歴史的事実

のみならず、悲惨な、無差別な恐怖の実証であり、核への教訓でもあります。

現在、「核戦争三分前」と警告されていますが、五分、十分、いや核完全阻止に、時計の針を逆戻りさせるまでにしなければなりません。小さな人間一人ひとりの、努力の積み重ねで、平和は築かれ、実現できると私は信じております。

私は、生命の続く限り、語りついで「風化」を防ぎたいと思えます。待っていたのでは、平和の輪は拡大いたしません。天から与えられるものでもありません。自から訴え続けることが最大の生きがいのある生活だと、ヒロシマのミチコは考え、行動しています。

最近、私は、四十八年間の苦しみから、ようやく周囲の状況が客観的に見えるようになりました。

夢と希望の十五歳の青春を、お国のために捧げてきましたが、一九四五年八月六日、数多くの友だちと、無差別に人びとが、一瞬のうちに悲惨な最後を告げ、私は苦痛と怒りで身のおきどころもなく、悲しみにうちひしがれた毎日でした。

思えば、母が残がいの下敷きの中から私を引っぱりだして助けてくれましたが、まさに生地獄の惨状を呈していました。

母は女手一つで、差別の中にも、傷ついた私の心を励まし続けましたが、十四年前に亡くなりました。私一人だったら、おそらく自殺していたことでしょう。

最愛の母を失い、私は殻の中から出て、二十一年もの沈黙を破って戦争を知らない若い人びとに被爆体験を語り始めました。

ヒロシマが願う平和の心を叫び続けていきたいーヒロシマのミチコの願いであります。

(ワールト・フレンドシップ・センター)

●武蔵野東小学校四年生の詩集・作文集「第五福竜丸へ」から

四年B組 新井彩冬実  
ぼくは行きたい。はるかな海をこえて……。また働きに。マグロをとりに。だが行けない。なぜ？放射能だ。放射能がぼくの体をいたずらしたんだ。ぼくの体では、もう海にもいけない。だけでもぼくの心は海でおよいでいる。はるかな海をこえて……。ほら、仲間がぼくをよんでいる。仲間がぼくを待っている。

四年A組 谷口光  
ぼくは、第五福竜丸を笑さい見てくださいとおもいました。少しきかないけれど、水爆にやられてもまだ生きています。ぼくにはまだ動いて漁船としてがんばっているように見えました。

ぼくは、大人になってりょうしになれたら第五福竜丸でりょうしをしたいです。ですが、世界を何十回もほろぼしてしまふほどの、核兵器が存在していてそれがなくなるまで広島ドームとともに第五福竜丸を守っていかなくてはならないので、第五福竜丸よりりっぱな漁船をつくりたいです。